
シンジ、18歳の誕生日

red-x

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンジ、18歳の誕生日

【Nコード】

N8986E

【作者名】

red-x

【あらすじ】

サードインパクトから何年も経ったが、アスカの戦いは終わっていない。アスカはレイとの戦いに決着を付けるべく、覚悟を決めた。

(前編) (前書き)

(注) この話はLRSではありません。

（前編）

シンジ、18歳の誕生日（前編）

（注）この話はLRSではありません。

サードインパクトから何年も経ったが、アタシの戦いは終わっていない。そう、以前は頼もしい戦友であった綾波レイとの戦いがだ。だが、アタシはレイとの戦いに決着を付けるべく、覚悟を決めた。そう、今日は2019年6月3日の月曜日。決着を付ける運命の日まであと3日しかないのだ。

「おはよう、アスカ。」

「おはよう、シンジ。朝御飯はなあに。」

「トーストとサラダにしたよ。」

「ありがとう、シンジ。」

アタシはシンジに礼を言うと、テーブルに腰掛けた。すると、ミサトが寝ぼけ眼で起きてきた。

「おはようございます、ミサトさん。」

「ミサト、おはよう。」

アタシとシンジはほぼ同時におはようを言った。

「おはよう、シンちゃん、アスカ。加持はまだ起きてこないの?」

「加持さんなら、急ぎの用があるとかで、朝早く出かけましたよ。」

シンジが答えると、ミサトは黙って席に着いた。そこにさつとシンジがコーヒーを出

すと、ミサトは『ありがとう、シンちゃん』と言って美味しそうに飲んだ。

そう、今のアタシは、加持夫妻及びシンジと同居しているのだ。サイドインパクトの

後、自分の本当の気持ちに気付いたアタシは、それまで通りミサト達と暮らしたいと希望した。

シンジと離れて暮らしたくなかったからだ。

その生活は加持さんがひょっこりと生きて戻ってきて、ミサトと結婚してからも続い

た。さすがに家が狭くなったので、隣の家の壁をぶち抜いて2軒分の家を一つにした

ので、広さについては十分になった。

だが、この生活を維持するのは大変だったのだ。色々な所から邪魔が入ったからだ。

最初は碇司令だ。リツコと結婚してシンジと一緒に暮らしたいと言ってきたのだ。し

かも、レイも同居すると言ったのだ。

最初はシンジも乗り気だったようだったが、アタシが策を巡らしたので断念した。ア

タシは、素直になれず、シンジと一緒に住みたいとは最後まで言えなかった。だから

泣き落とし作戦に出た。

シンジに『シンジもアタシを見捨てて行くのね。』と言って、涙をポロポロと流した

のだ。あの時のシンジの慌てよう。アタシは天涯孤独の身で淋しいとか、シンジの料

理は美味しいとか、色々と口実を並べ立てて、シンジに見捨てられたくないと言って、

引き止めにかかったのだ。結果的にこれが大当たりで、シンジは碇司令との同居を断った。

その半年後にミサトは加持さんと結婚したのだが、その時も危うかった。シンジがミ

サトに遠慮して、家を出ようと言い出したのだ。だが、いくら何でもアタシとシンジ

の二人で暮らすことは出来ない。シンジは碇司令やリツコと一緒に住むことを考えていたのだ。

だが、アタシはミサトと一緒に住みたいと言い張った。あのレイと同居なんてとんでもない。既にこの頃には、レイもシンジに色々とちょっかいをかけてきていたから、レイと同居なんて事態になったら、うかうかしていられなくなるからだ。

この時も何とかシンジを説得して、アタシとの同居を続けさせることに成功した。シンジも結構粘ったが、アタシが頑として譲らなかったから根負けしたみたいだ。

と言う訳で、アタシとシンジの同居は未だに続いている。

「アスカ、もう行かないと。」

ちよつと考え事していたアタシは、シンジの言葉に我に返った。

「あつ、ごめんね。」

アタシは急いで支度をする、シンジと一緒に学校へと走って行った。

学校では、少し目を離れた際にシンジはレイと二人きりになっていた。アタシは少し離れた所で二人を見ていたが、思わず声を出しそうになった。レ

イはシンジに懸賞
に応募するから名前を貸してと頼んでいた。人の良いシンジは快諾し、怪しげな紙に
名前を書いていたのだ。

アタシはそれを見てレイも同じ手段を使おうとしていることが分かった。その紙はア
タシの感が正しければ婚姻届だ。おそらくレイはシンジの誕生日の
朝早くに役所にそ
れを届けるつもりなのだ。何て卑怯な。アタシは頭に血が昇った。

アタシは急いでその場を離れると、加持さんに電話した。もう、手
段を選んでいる暇
は無い。アタシは婚姻届に必要な書類を2セット揃えるように加持
さんに頼んだ。

その日の夜、アタシは加持さんから書類を受け取った。そして、
シンジをうまく騙
して婚姻届にシンジの名前を書かせた。その後、念のため加持さん
に書類が正しい
かどうか、チェックしてもらったことにした。

加持さんは一通り書類を見たが、念のため役所に勤めている友人に
確認してもらった
言って、1セットの書類を預かった。これなら万全だろう。仮にレ
イよりも早く役所
に着いても、書類が受理されなくてはしょうがない。うかうかして
いる間に、レイに

出し抜かれる恐れがあるからだ。

アタシは部屋に戻ると、3日後の本番のことをシミュレーションした。いかにしてレイを出し抜くか、どうやってレイの邪魔をするか、かなり頭を悩ませたのである。

実は、シンジとの仲は中々前進していない。それはレイのせいだ。レイもサードインパクトの後、自分の気持ちに気付いたのだろう。何かにつけてシンジに絡んで来るのだ。そして、ことあるごとにアタシと衝突していた。

レイは何かというとシンジにくつついて、胸を押しついたりして、シンジの気を引いている。そんな真似はアタシには出来ないし、胸もレイの方が大きいから太刀打ち出来ない。だから、学校ではレイに押されっぱなしだった。

その代わり、アタシはシンジと同居していることを最大の武器にしている。火曜日と金曜日を買う物デーにして、必ずシンジと一緒に帰ってスーパーで買い物をするようにしたのだ。だから、その日はレイの機嫌がすこぶる悪い。

また、月に2回は荷物持ちデーにして、シンジを買う物を付き合わせている。シンジはぼやきながらも付いて来てくれる。アタシはその時に何気なくシンジの服を選んで

あげたり、アタシの服選びを手伝ってもらったりと、シンジの氣を引くようにしている。そして重要なことだが、必ずニコニコするように心がけ、隙を見てはシンジの手を引っ張って何気なく手をつないだりするようにしている。

家の中でも、なるべくシンジと一緒に過ごすようにしている。料理も手伝うし、掃除や洗濯も一緒にこなす。また、なるべく格好良い所を見せようと、勉強を教えたりもしている。

アタシがこんなに努力しているのに、シンジはお子ちゃまだから、アタシの気持ちに全然気付かないようだ。もっともレイの気持ちにも気付いていないから、善し悪しと言う所か。

だが、いつかは決着を付ける時が来る。それが3日後なのだ。

「アタシは負けない。負けてらんないのよっ！」

そう言つて、自分に氣合を入れた。

6月6日のシンジの誕生日、アタシは朝の4時に起きた。そして朝食を済ませ、身支度を終わると、急いで家を出た。空はまだ暗かった。

アタシは前日に予約していたタクシーに乗ると、一路、第3東京市役所へと向かった。

役所へは、20分ほどで着いた。無論、誰もいない。はずだったのだが、やっぱりと言うか、レイが入口近くで立っていた。

「おはよう、レイ。一体何の用かしら。」

「おはよう、アスカ。ちょっと知り合いに頼まれたことがあって。」

そう言いながら、レイはにこやかに近付いてきた。だが、アタシまで後数歩という所で、いきなり蹴りを繰り出してきた。無論、アタシはとっさに避けたが。

「ちっ。」

レイは舌打ちした。どうやらレイが狙っていたのは、アタシの持っている封筒らしい。

この中に婚姻届と必要な書類一式が入っているのだ。

「はん、相変わらずシンジの事になると、見境い無しね。」

「あら。アスカもそうでしょ。」

レイはそう言うとニヤリと笑った。ふん、お見通しって言う訳ね。

「アタシは絶対にアンタなんかには負けないわ。」

アタシはレイを思いつきり睨んだ。だが、レイは再びニヤリと笑った。

「あなたには、良いものを用意したわ。」

レイが『パチン』と指を鳴らすと、ぱらぱらと黒服の男達が十数人も現れた。

「アスカには、この人達と暫く遊んでもらうわ。」

レイはそう言うなり背を向けて歩き始めた。うっ、絶体絶命のピンチ。アタシは怒りに燃えた。

役所が開くまで、アタシは逃げ回っていた。そして、役所が開くと同時にアタシは入口へと走り出した。気付いたレイがアタシに蹴りを繰り返すが、アタシは間一髪避けた。目指すは戸籍課だ。

レイも必死になって追いつがって来た。そして抜きつ抜かれつしながら、二人して鬼のような顔をして懸命に走った。

だが、正義は必ず勝つ。タッチの差で、アタシは窓口の女の人に書類を手渡すことが出来た。呆然とするレイ。そう、アタシはレイとの戦いに終止符

を打ったのだ。

だが、アタシはその時、レイがニヤリと笑ったことに気付かなかった。

（中編）

サードインパクトから何年も経ったが、アタシの戦いは終わっていない。そう、以前は

頼もしい戦友であった綾波レイとの戦いがだ。だが、アタシはレイとの戦いに決着を

付けるべく、覚悟を決めた。そう、今日は2019年6月6日の木曜日。今日こそ決着を付ける運命の日なのだ。

タッチの差で、アタシは窓口の女の人に婚姻届などの書類を手渡すことが出来た。

呆然とするレイ。そう、アタシはレイとの戦いに終止符を打ったのだ。だが…。

「あのお、この書類はお受け出来ないのですが。」

がぐん。アタシは目の前が真っ暗になった。そして窓口に駆け寄って、理由を尋ねたが、『書類に不備があるからです。』の一点張りで、理由は教えてくれなかった。

「アスカ、残念ね。理由は私が教えてあげるわ。」

そういつつ、レイはアタシに背を向けて歩き出した。アタシは少し迷ったが、レイの後に付いて行った。

レイは役所の中のドトールに入って行った。安いコーヒーを出してくれるチェーン店

だ。レイが先に注文し、アイスコーヒーを受け取ると席に着いた。アタシもそれに倣ってアイスコーヒーを持ってレイの前に座った。

「レイ、教えてもらおうじゃない。一体何で受理されなかったの？」

「それはね、私の方が先に受理されていたからよ。」

「でも、アタシの方が先に書類を出したのに、何故？」

「昔ね、日曜日に飛行機が墜落して、新婚カップルが大勢死んだことがあったらしい

の。それがね、そのカップルの半分以上が入籍していなくて、物凄いトラブルがあっ

たらしいの。それ以来、役所では夜間休日を問わず、24時間婚姻届を受理するよう

になったらしいの。理由はともかく、今は24時間婚姻届を受け取ってくれるから、

私の分は昨日の夜12時きっかり、というか今朝の0時丁度に出したの。アスカが来

るんじゃないかと思ってビクビクしていたけど、来なくて安心したわ。」

「じゃあ、レイが先に出したから、アタシのが受け取ってもらえなかったの？」

アタシの顔は真っ青になっていた。

「そうよ。アスカも書類に不備が無いか、何度も確認してるでしょ。それなのに駄目だったっていうことは、他に説明がつかないんじゃない。」

「じゃあ…。」

「そうよ。今日から私のことは碇レイって呼んでね。」

「アタシは認めないわ。それにシンジも認める訳は無いわ。」

「アスカ、往生際が悪いわね。あなたも、碇君が離婚届を出すなんて思わないでしょ。それに裁判を起こすことも。」

そう、アタシは何かの話で聞いたのだが、一度出された婚姻届は、本人がいくら無効だと言っても、撤回されないらしいのだ。だから、方法は2つ。裁判を起こして無効であることを証明するか、離婚届を出すかだ。アタシはシンジがそんなことをする筈が無いと思ってこの作戦を思いついたのだが、レイも同じ考えらしい。

「でも、アタシはあきらめないわ。」

「まあ、ご勝手に。私はこれから学校に行くから。じゃあね、残念だったわね。」

レイはそう言い残して去って行った。アタシはレイが去った後、涙がポロポロと流れて止まらなくなった。

その日、学校ではレイは何も言わなかった。不気味なほどに沈黙を守っていたのだ。だが、時折アタシに向かって勝ち誇ったような笑みを向けてきていた。はつきり言って凄く頭に來た。

授業中のアタシはどうしたら良いのかずっと考えていた。やっぱりアタシはシンジのことが好きだ。だから、絶対に諦められない。何とかして挽回しないといけない。

案その1：シンジと二人で駆け落ちする。

駄目だ。シンジがウンと言わないだろう。

案その2：レイを亡き者にする。

駄目だ。そんなことをしたら、シンジに間違いなく嫌われてしまうというか、アタ

シは何て恐ろしいことを考えてしまったのだろう。

案その3：愛人になり、事実上シンジを独占する。

アタシのプライドが許さないし、それは置いておいても独占する妙案も無い。却下だ。

案その4：レイに土下座してシンジを譲ってもらう。

駄目だ。レイがそんなことでシンジを譲ってくれる訳がない。

案その5：MAGIで戸籍を書き換える。

駄目だ。リツコはおそらくレイの味方だろう。それに、これは犯罪行為になる。

案その6：とにかく行動あるのみ。

そうだ、これしかない。色々考えてもしようがない。当たって砕けるだ。もう、プライドなんかにかたわっていられない。シンジに泣きすがってでもアタシと一緒になつてもらおうように頼んでみよう。

アタシは心を決めた。

「ねえ、シンジ。ちょっと顔貸して。」

アタシは昼休みにシンジを呼び出した。そして人気の無い場所に連れて行った。

「どうしたのaska。こんな所に呼び出したりして。」

「そうね。まずは、シンジ。お誕生日おめでとう。」

「あ、ああ。ありがとう。」

「でも、ごめんね。アタシ、シンジの誕生日プレゼントを買っていないの。」

「えっ。ああ、気にしなくても良いよ。」

そう言いながらも、シンジはちょっとがっかりした様子だったわ。

「ううん。その代わりに、アタシはシンジに何かしてあげたいの。そうね、例えばキスとか、それ以上のことでもいいわ。」

「ア、アスカ。一体どうしちゃったのさ。急にそんなことを言い出して。」

シンジは少し面食らっているようだ。だが、ここで引いてはいけない。

「本当のことを言っわ。アタシ、シンジのことが大好きなの。好きで好きでたまらないの。だから、物を贈るんじゃないくて、アタシの気持ちを贈ろうと思ったのよ。」

「ア、アスカ…。」

シンジは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたわ。本当に驚いたみ

たい。

「でも、アスカ。僕は何も取り柄がないし、アスカに釣り合うような男じゃないし。それに、アスカは前に僕のことを嫌いだって言っていたし…。」

「シンジは、アタシのことが嫌いなの？」

「ううん、そんなことはないよ。アスカの気持ちは嬉しいし、アスカは可愛いと思うし、

でも急な話だから、悪いけど今すぐに返事は…。」

「レイのことが好きだから？」

そう言いながら、アタシは自分の涙腺が緩むのを感じていた。もし、シンジがこれでウンと言ったらどうしようかとも思ったが、アタシはどうしても聞きたかった。

「分からない。レイはきょうだいみたいなものだと思っていたし。」

アタシはそれを聞いて少しほっとした。

「他に好きな女の子がいるの？」

「ううん、いないよ。」

「じゃあ、アタシが嫌いでなければ、ウンって言ってもいいじゃない。」

「そ、そんなこと言われても…。」

「じゃあ、お願い。アタシの気持ちを少しでいいから受け止めて欲しいの。」

アタシはシンジに近寄って、シンジの唇にアタシの唇を近づけていったわ。そして、寸前で目を瞑ったの。でも、直ぐにシンジの唇が触れたわ。アタシはシンジの背中を強く抱きしめたわ。そして、しばらくそのままの格好でいたの。

「ア、アスカ。ごめん。」

「何よ。シンジは何か悪いことをしたの？」

「いや、そうじゃないけど。」

「じゃあ、何で謝るのよ。」

「こんな、はつきりしない僕で申し訳ないと思って。」

「そう思つのなら、これから二人で出かけない？」

「えっ、何処へ？」

「海辺のペンションか、高級ホテルに行くの。そして、二人で美味しく夕食を食べるの。もちろん、翌日の朝食も。」

「ア、アスカ、冗談は止めてよ。」

「冗談じゃないわよ。アタシがこんなことで冗談を言うと思う?。」

「思わないけど、でもいつものアスカじゃないよ。」

「そうよ、いつものアタシは我慢していたの。いつかシンジから好きだって言っても
らおうと思ってるね。でも、もう我慢の限界なのよ。」

「アスカ、本当に僕のことを好きなの?信じてもいいの?。」

シンジが乗ってきたわ。これはチャンスね。

「そうよ、信じてちょうだい。そうね、その証しとして、アタシは
今晚シンジの部屋
に行くわ。そして、シンジにキスをして、その後はシンジに全てを
任せるわ。」

「えっ、そ、それって…。アスカは自分の言っていることが分かっ
ているの?」

僕だって、一応男なんだけど。途中で止まらなくなるかもしれない
んだよ。」

シンジはちょっと顔が赤くなったわ。もう一息ね。

「良いの。アタシ、シンジのことが好きだから。それに、そうなっ
たら、来年の誕生
日プレゼントが赤ちゃんになるかもしれないじゃない。アタシ、シ
ンジの赤ちゃんな

ら、是非欲しいわ。」

いやだ、アタシったら何て恥ずかしいこと言ってるんだろう。

「それほど言うんなら「ちょっと待った!!」」

あつ、やっぱりお邪魔虫が現れたわ。アタシは自分の計画が崩れゆくを感じていた。

（後編）

サードインパクトから何年も経ったが、アタシの戦いは終わっていない。そう、以前は

頼もしい戦友であつた綾波レイとの戦いがだ。だが、アタシはレイとの戦いに決着を

付けるべく、覚悟を決めた。そう、今日は2019年6月6日の木曜日。今日こそ決着を付ける運命の日なのだ。

「それほど言うんなら「ちよつと待った!!」」

あつ、やっぱりお邪魔虫が現れたわ。案の定、レイがこの場所を見つけてしまった。

「碇君、騙されちゃ駄目よ。アス力は、嘘をついているわ。」

「な、なによ。何処が嘘なのよ。」

「アス力は碇君のことが好きなんじゃなくて、単に私に渡したくないだけなの。だから、アス力を選んだら、碇君は不幸になるわ。」

「そんなことないわよ。シンジ、こんな女の言うことを信じちゃ駄目よ。」

「まあいいわ、そんなことは。それよりも碇君には大事な話がある

の。私は今日から
碇レイになったの。

「えっ、父さんの養子になったの？」

「違うわ。今日、役所に碇君との婚姻届を出してきたの。」

「えええええええええええええええええつ！」

シンジは本当に驚いた顔をしたわ。

「だから、浮気は駄目なの。良いわね。」

「そ、そんな勝手なことをして、酷いよ。ねえ、アスカもそう思うでしょ。」

だが、アタシは返事が出来なかった。

「碇君。アスカも同じことをしようとしたのよ。」

「ええっ、何でさ。」

「碇君がはつきりしないからよ。私とアスカのどちらを好きなのか。」

L

「そ、そんなあ。だって二人とも、僕のことを好きだなんて今まで一度も言わなかった

「のに。急に何でそんなことを言うのさ。」

「鈍いこと、それは度を越すと罪になるわ。」

「僕が鈍いつて言うの？」

「そうね。」

「でも、僕は二人とも、家族だと思ってきたし、そんなこと急に言われても困るよ。」

「じゃあ、これからゆつくりと言うわ。でも、書類上は、私達は今夫婦なの。だから、今日からは一緒に住むの。」

「ちよつと待つてよ。」

「碇君は、私が嫌いなの。」

「そ、そうじゃないけど。」

「私を捨てて、離婚する？」

「ちよつと待つてよ。結婚していないのに。」

「もうしてるの。だから私は碇君の妻。」

「だから、そんなことは僕は知らないよ。」

「碇君は私を捨てるのね。そう、私はゴミなのね。」

「違つたら。」

「じゃあ、私を捨てない？」

「そんなことしないよ。」

「じゃあ、これで私は碇君の妻ね。」

「ど、どうしてそうなるのさー！」

「私と碇君は、結ばれる運命にあるからよ。」

「もう、いいかげんにしてよ。ふざけないでよ。」

シンジがそう言って怒ったら、レイは涙をポロポロ流し始めたわ。まずい、シンジは泣き落としに弱いから。

「ど、どうして泣くのさ。」

「碇君は私を人間だと思っていない。だから嫌がるの。私はそれが悲しい。」

「そういう問題じゃないんだよ。」

「でも、私を受け入れてくれる人はいないかもしれない。真実を知ったら、きつとどの男の人も離れて行くわ。私には碇君しか頼れる人はいないの。」

「あ、綾波。」

「でもいいの。私は人間じゃないから。人並みの幸せを望むのは罪

なのね。」

「な、何てこと言うのさ。そんなことないよ。」

「私は幸せになっても良いの?」

「も、もちろんだよ。」

「本当に?」

「う、うん。」

「嬉しい。碇君、大好き。」

レイはそう言うと、シンジに抱きついてキスをしたわ。キーッ! アタシは、はらわたが煮えくり返るような思いをしたわ。

「ちょっと、何すんのよレイ! 離れなさいよ!」

アタシが怒鳴ると、シンジは我に返ってレイから離れたわ。

「私のファーストキス。碇君で良かった。」

「あ、綾波...。」

「私を捨てないで。お願いだから。碇君に捨てられたら、私死んじやう。」

「駄目だよ、死ぬなんて言っちゃ。」

「じゃあ、私を捨てないで。これで離婚歴がついたら、もう私は幸せになれないの。」

「ちょ、ちよっと考えさせてよ。」

「うん、分かった。碇君を信じる。碇君は絶対私を捨てない。そう信じてるから。」

レイはそう言ってシンジから離れたわ。そして丁度その時、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴ったの。だからアタシ達3人は急いで教室へと戻ったわ。

5時限目の授業中、アタシはずっとシンジを見ていたわ。シンジは物思いに耽っているようだったわ。きっと、アタシを取るかレイを取るか、悩んでいるのね。

休み時間になったら、シンジは教室を出て、どこかに消えてしまったわ。アタシとレイはお互いを牽制していたから、シンジを見失ってしまったのよ。

でも、6時限目までにシンジは戻って来たの。でも、シンジは5時限目の時と比べて、顔に深い悩みの色を浮かべていたわ。これだけ悩むなんて…。アタシは一抹の不安を感じたわ。

これだけ悩んで出す結論だもの、シンジは何があっても変えないと思うのよ。それがアタシにとって良い結論だったら良いけれど、もしそうでなかったら…。アタシは考えたくもなかった。

でも、レイはズルい。シンジがどちらを好きかという論点から目をそらして、レイが幸せになれるかどうかという論点にすり替えている。これは危険な考え方だ。何故なら、レイはシンジと一緒にしないと幸せになれないが、アタシは誰と一緒にしても幸せになれるという方向に行きかねないからだ。

自分の生い立ちの不幸を逆手に取るなんて、レイの作戦には脱帽したわ。でも、あーるいはそれもレイの本心なのかもしれない。だが、そうするとアタシは不利になる。アタシの心は不安で張り裂けそうになった。

授業が終わり、帰宅する時間になった。今日はアタシ達の家でシンジの誕生

パーティーをする予定だ。ヒカリとアタシで先に帰って食事の準備をするのだ。

アタシは後ろ髪を引かれる思いで帰途についた。駄目で元々と思いつつ、ヒカリを

通じて鈴原にシンジと一緒に帰るようにとお願いしておいた。

シンジの誕生パーティーは、いつものメンバーで行われた。ヒカ
リにレイ、鈴原に
相田を加えた6人だ。最初はシンジに順番にプレゼントをしていく。
アタシは帰りが
けに買った時計がプレゼントの品だ。シンジはアタシから何ももら
えないと思ってい
たらしく、驚いた顔をしていた。

その後は相田と鈴原が漫才をやったり、アタシとヒカリで隠し芸を
したりしたが、直
ぐにカラオケへと突入した。アタシとレイは張り合ってシンジとデ
ュエットした。ヒ

カリと鈴原も一緒に歌ったため、相田は少ししょんぼりとしていた。

それを見たシンジが、アタシに相田とデュエットするように頼んで
きた。もちろん最

初は断った。レイに頼めばと言いつつ放ったが、レイは『嫌』と一言で
断ったということ
だった。アタシは悩んだが、シンジの困った様子を見て、渋々頼み
を聞くことにした。

相田は、アタシが声をかけると、飛び上がらんばかりに喜んだ。ア
タシは相田が変な
誤解をしたらまずいと思ってやんわりと釘を刺した。

「アンタがつまらなそうな顔をしているからよ。みんなが楽しくし
なきゃ嫌だって言
う奴がいるからね。」

「ああ、それでも良いよ。惣流って結構良い奴なんだな。」

「はん、そんなこと言っても何も出ないわよ。それより、歌うからには全力で歌うわよっ！」

こうして、アタシと相田は3曲続けて熱唱した。相田は思ったよりも歌がうまかったの
で、アタシも悪い気はしなかった。

その後、アタシはシンジと歌ったり、相田や鈴原達とも一緒に歌った。ヒカリもアタシの目配せを受けて、相田と何回かデュエットした。だが、レイだけはシンジ以外とは歌おうとしなかった。

7時を過ぎると、ミサトが帰ってきた。そうになると、ビールの出番だ。アタシ達にも、
ワインが回ってきた。そんなほろ酔い加減の中で、いきなりレイが爆弾発現をした。

「みなさん、ちゅうもくうっ。これから重大発表を行います。
今日、私こと綾波レイは、碇君と結婚し、碇レイとなりましたっ。」

「う、嘘よ！皆、信じちゃ駄目よ。」

アタシは声を張り上げて否定した。だが、レイも負けてはいなかった。

「碇君。今日こそはつきりさせてもらっわ。私と離婚してアス力を取るのか、それとも私を妻と認めるのか。さあ、どうするの。」

シンジはレイの言葉にゆっくりと立ち上がった。そして、静かに話し始めた。

「僕は、今日役所に電話して、僕の婚姻届が受理されたのかどうか聞いてみたんだ。

そうしたら、綾波の言う通り、僕の婚姻届が提出されて受理されたそうだ。だから、

僕は結婚したことになるらしい。おそらく、綾波の言うことは本当だよ。」

それを聞いて、皆哑然とした。

「僕も迷った。本来は綾波を叱らなくてはならない。でも、婚姻届を撤回するのは不

可能らしい。裁判を起こすか、離婚届を出すしかないらしいんだ。」

そこまで聞いて、アタシは耳を塞ぎなくなった。嫌だ、もう聞きたくない。アタシの聞き

たいのは、どちらが好きかなのだ。シンジの本心なのだ。だが、シンジは続けた。

「だが、僕はどちらの方法も取らないつもりだ。だから、綾波をお願いしたい。もう一度白紙に戻して欲しいんだ。」

シンジはレイを見つめた。だが、レイは涙を流して言った。

「嫌。私は碇君と一つになりたい。碇君は私が嫌いなのか？」

「違うよ。でも……。」

「じゃあ、問題ないわ。」

「あ、綾波……。」

「私を地獄に突き落とすつもりなら、離婚届を出して。そうでなければ私を幸せにして。」

もう、アタシは我慢出来なかった。

「ちょっと待った！シンジの気持ちはどうなのよ。アタシはそれが聞きたいわ。シンジ

がアタシ達のことをどう思っているのか、それだけを聞きたいわ。」

「そ、それは……。ごめん、良く分からないんだ。でも、僕は綾波の決意が固いなら、

しょうがないと思う。どうしても言うなら、このまま結婚したままにいるしかないと思う。」

それを聞いたレイの顔がニヤリと笑ったわ。そして、さらにシンジは続けたの。

「アスカなら綺麗だし、性格も良くなったし、スタイルも良いし、頭も良い。どんな人と

も仲良く出来るし、これからも、素晴らしい人にめぐり会えると思う。アスカの可能性

は無限なんだ。でも、綾波は違う。人見知りするし、良い相手にめぐり合えるかどうか、分からないんだ。」

「イヤよ！そんなの、理由にならないわ。」

「聞いてよ、アスカ。アスカは素晴らしい女性だと思う。僕にはもつたいない位だ。だから、もっと良い人を見つけてよ。」

「イヤよ！イヤよ！イヤよ！」

「僕が保証するよ。アスカに出会った男は、例外なくアスカのことを好きになるよ。」

今のアスカは、誰から見てもステキな女性だよ。」

「じゃあ、アンタもアスカのことを好きになったの？」

「そ、それは……。」

「ほら、嘘じゃない。」

「嘘じゃないよ。僕は、会った時からアスカが好きだった。それは本当だよ。」

えっ、本当なの。だったら、シンジはアスカのことが好きだってことじゃない。だって、

『会った時から』って言ったもの。現在進行形じゃない。

「じゃあ、アタシを選びなさいよ。」

「だから言ったじゃないか。アス力は僕にはもつたいないんだよ。それに、僕は知らない

かったことはいえ、綾波と結婚しちゃったんだよ。理由はともかく、一度結婚した人を

突き放すことは出来ないんだよ。だから、僕のことは忘れて欲しい。

」

こいつったら、何も分かつちやいない。アタシの性格が良くなったなんて大間違いなの

よ。アタシは切れてまくしたてた。

「イヤッ！アタシの性格が良いですって！冗談じゃないわ！アタシはシンジに好かれ

たいと思って、猫を被っているだけなんだから。シンジが好きになつてくれないんだ

ったら、馬鹿らしくてやってらんないわよ。アタシがどんな思いで笑顔を振りまいて

きたか、アンタに分かる？アタシだって我が儘を言いたかったわよ。好きでも無い奴

とは喋りたくもなかったわよ。でも、シンジに嫌われたくないから、シンジに少しで

も気に入らいたいから、アタシはいい子を演じてきたのよ。それなのに、何の努力も

しないレイと結婚するですって。冗談じゃないわ。今までのアタシの努力は何だった

っていうのよ！許せない、絶対に許せないわよ！」

アタシは大声で叫ぶと、大粒の涙を流した。もう我慢出来ない。シンジを失いたくな

い。その思いがアタシの正常心を奪っていった。言うことが支離滅裂になりそうだった。

「いいっ！アタシの性格はレイよりもずうっと悪いのよ。男なんて殆ど大嫌いだし、

女だって半分は嫌いよ。そんなアタシの性格が良いですって。ハン！笑っちゃうわ。

シンジは何も分かつちやいないんだから！アタシはシンジが好き！シンジじゃなく

ちゃ駄目なの！もう、シンジしかないの！シンジがいるからアタシはいい子でいら

れるの！アタシは今まで頑張ってきたわ。だから、努力が報われてもいいじゃない。

頑張っても頑張っても報われないなら、シンジがレイを選ぶなら、アタシはいい子に

なんかならない！どうして、どうしてアタシを選んでくれないのよ！どうして、どう

して分かつてくれないのよ！」

アタシは涙をボロボロと流した。鼻水も垂れて、きつと物凄くみっともない姿なんだ

と思う。でも、悲しくて、悲しくて、涙も鼻水もが止まらなかった。努力はきつと報

われる、シンジはいつかきつとアタシの努力を分かってくれると思っていたのに。

それだけを信じて頑張ってきたのに。

「あきらめなさい、アス力。碇君は私を選んだのよ。」

レイはシンジの顔を両手で掴むと、濃厚なキスをした。シンジも抵

抗しなかった。

アタシはレイに負けたことをその時初めて自覚した。アタシの魂の叫びもシンジの心

には届かなかったのだ。だからもう、アタシには打つ手が無かった。それが分かって

いるからこそ、アタシの涙は止まることが無かった。アタシは顔をくしゃくしゃにし

て涙を流し続けた。

その日、床に水たまりが出来るほど泣いたのだった。そう、涙が涸れるほど。だが、

アタシの涙も、ついにシンジの心を動かすことは無かった。シンジはその後誰に何を

言われても離婚届を出すことはなく、アタシの人生に碇シンジという名の男が絡むこ

とは、この日を境にして無くなったのだ。

・エピソード・

「おゝい、ただいま。」

物凄い修羅場になっているとも知らず、加持さんが陽気に帰って来た。

「おつ、どうしたんだみんな。」

加持さんも雰囲気がおかしいって分かったらしい。でも、アタシは加持さんのことを
見ることが出来ず、俯いていた。

「そつだ、シンジ君に謝らないとな。本当に悪い。済まない。申し訳ない。」

「ど、どうしたんですか、加持さん。」

だが、加持さんはそれには答えなかった。レイとシンジがくっついていたからだろう。

「ん、駄目だぞ、シンジ君。レイちゃんと一緒にいたら。アスカと一緒にいなきゃ。」

「加持さん。実は、僕は綾波と結婚したんです。」

「何馬鹿なことを言ってるんだ。シンジ君は、惣流シンジになったんだ。はっはっは。」

俺が間違えて書類を書いたせいだな。いやあ、悪いなあ。」

「えっ！！！！」

シンジは驚いたようだ。えっ、惣流シンジって、一体何なの？

「どういうこと。碇君は、私と結婚したはず。」

レイの声がした。

「いやあ、昨日役所の友人の所に行ったら、婚姻届は18歳の誕生日の前の日から受理されるっていうんで、昨日届けたんだ。その時名字を間違えて惣流にしちゃったんだよ。」

えっ。そ、それって。ま、まさか…。

「ほら、戸籍謄本もある。」

「見せてください。」

シンジの声だ。

「あっ、本当だ。」

「一体何故。何故碇君が惣流君になるの。」

アタシも涙を拭き、顔を上げて戸籍謄本を見た。確かにアタシとシンジが結婚したのになっている。し、信じられない。夢じゃないかしら。アタシは

頬をつねったが痛かった。あつ、これは夢じゃないんだ。

やった！やった！やった！奇跡が起きた！起死回生の大逆転だ！アタシは加持さんに抱きついて、何度も何度も礼を言った。そして、嬉しくて嬉しくて嬉しくて、もう涸れ果てたと思っていた涙が再び滝のように流れたのだった。

後で分かったことだが、法律上は誕生日の前日に年齢が一つ上がるらしい。4月1日生まれの人が上の学年に上がるのもそのせいらしいのだ。だから、昨日婚姻届を出すことが出来たということだ。

こうして、見事アタシとシンジは結婚した。シンジも観念してアタシとの結婚を認めた。

その晩、レイが青ざめ落ち込んだ顔で帰って行ったのは言うまでも無い。そして、加持さんは気をきかせて、私とシンジを市内で一番高級なホテルへと連れて行ってくれた。おかげで、翌朝二人は美味しい朝食を、幸せ一杯の気分で味合う事が出来た。ちよつと遅めの朝食だったけどね。アタシ達はとてもステキな思い出を作ることが出来たのだ。

もちろん、その成果は約10カ月後に現れた。碇司令は、おじいちゃんになったのだ。

お
し
ま
い

・エピローグ・（後書き）

あとがき

「アタシの人生に碇シンジという名の男が絡むことは、この日を境にして無くなったのだ。」

というアスカの言葉は本当でした。なぜなら、シンジは惣流シンジとなったからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8986e/>

シンジ、18歳の誕生日

2010年10月9日13時55分発行